

4781

2/29
5
722

英國コーンモリアー氏聞
松井鉤夫著

世界へん 叢地ち 奇論きろん
流言りゅうごん
全

明治十四年
十月刊行

松壽堂梓





天
大
大
大
大
大
大
大
大
大

世界一變地奇論

夫佛説に善行方便あれ、道家に意味深重の寓言あり、既に佛滅後五十六億七千万年の時にいたらば、此世界變して混沌未聞の地とあると云へる事説をわけては、あるかれどいまだ世界開けて万年の年を期したる人、とてもかし然りといへども爰も天地の變動風雨震雷、洪水山津浪じて地さげ水わさいて多くの人家を押し流し、山も海とありしたためしもあるかれども、此程世上の流言イタリヤ國の某天地の變を窮理したる説にて是をまた英國の人八十三歳に於ける老人此説を信じて、輕氣球を造りたりと事くしき評判あり。○茲に世

界の亡滅する事ありとて第一日目に川々へ水入り來り、
○二日目に大洪水、○三日目に大津浪、○四日目に川魚のころぞ死す、○五日目に海魚のころぞ死す、○六日目に世界の男女啞或ひは聾と成る、○七日目に大風雨にて土藏家屋を碎く、○八日目に大地震、○九日目に大地破烈して家藏を沈没す、○十日目に山岳動揺してやまぞ、○十一日目に鳥獸殘らぞ死す、○十二日目にのころぞ人間が死す、○十三日目に衆星火の玉とありて落る、○十四日目に山岳一時鳴動して飛散る、○十五日目に世界殘らぞ焼失して朦朧とある奇異の

風説區々ありし如茲に戸部町暗闇坂半曳横町にかす
かに住める今田久平と云ふ愚直老夫ありけるが此程
世上の人の云なせる天地變動の事を聞及ひ寐ても起
ても苦勞に如りてたまりかねたばこのんでもさせ
るよりぎつちりつまる思案の底意嗚呼斯迄開化日進
の御代に生れ合なから是らの虚説に聊か驚く人々
も有べからざるなれど此程よりの霖雨にこふじはて
斯した事てハ米穀の高直天地變動のたげたる嗽し
より雨のふるのと米の直の上るの如一番こわる其外
千茶日用の品々いづれも高價に成り及ぶ是てハ自然
と融通尤士族方や官廳へ御勸の御方さまハ必らど

お困りハない事ながら下々の者の難義其日稼ぎの職
人かつぎうりの商人ハ諸色の高直にくらべてハそれ
程の如せぎハせき然しまたある所にばありあまる
身上故の家屋の普請廣大無邊三階造りはまだな事四
階三味座敷結構珍物奇品を置ならべ庭はハ四季の珍
花を愛と衣類ハ別かくいふも更なり酒池肉林に遊び
てハ權妻妾もれでたらいて猫じやらし是らがめうり
に盡ざれハ罪に當る人ハあるまい夫に引かへてかな
い暮しア、なんとおたものであらうと空打ながめ居
る所へ一ツ長屋の佐治兵衛が悴にて名をば西東午桂
とよび此程西洋學の塾となりし狡猾ものをりしも久

平が門口よりうちと一覗き「久平さんお宅でござり升るな何じよくふりつゝく雨をいどざり升せぬか「イヤあれハ午桂さんまこせに困りましぬ御天氣でござり升るおかしモシ此頃世間でいらく異變な風説をいたし升るあれハ一体どうもた所より見窮ていひ出した事ごり升す」さればこの本國においてもいになへより天門の博士有て風雨震雷時侯の寒暖又日月の盈晨を知るも是が彼の天門家の術表を建て景をばかり節季を定むるとあれば何の譯もない事をねト湯をのむよかよいひなせば久平額に皺よせ「イヤおまへさまハ博學ゆへ左右思つてわいてなされ升るか此程の世

間の風説海川の魚がみんな一時に死ぬの鳥類畜類がとな驚るの火の雨が降つて人間も皆死ぬのといハ升るとわしハ何だか薄氣味わるく口でハ何のろんな事があつてたまるものかといひ升けれど誠苦勞にないつてなり升せぬ「成ほどろれハ天變地天といつていつ何時どんな不事があるうも知れど僕などハいまだ世界に生れぬ事今年より廿七年いぜん江戸中の大地震人のばなとに聞傳てをるなれど其外相州信州山城などの震災はかゝりに聞てもおろろしく又ハ日本第一の高山不二淺間のづから火氣を發して焼出で淺間ヶ嶽などハ今に煙の出やまざるこそふしぎ也また大逆浪のあ



りし咄しハ遠州の荒井今切の海山逆浪にてあれ丈の
海に成りし事も肥前島原の大逆浪其外風損火災ハ
ぞへあげるといふとまあらむ既に人命とても老少不定
出る息ハ入るをまたはかなしといふもをるかな事
倍また先頃西洋の書物のうちに今度云ふらす奇變に
屢髣髴事ありたり其書に曰天より降るを蓄と云ひ地
より發るを害と云ふ蓄害の双び起るやソコ發るの
日に於て發にあらざ必らぞ其前兆かくんば非ざる也
火山の正に破烈せんとするや前日に於て鳴動する今
や明治盛開の時に當り一の異説あるハ「イタリヤ」國某
氏の窮理したる所なりと世の人此論に感溺して其虚

實を知る事能わむ ○太古「ソ」の大洪水ハ以前に預
言者ありて之を知る則ち「ソ」山上に大船を造りて是
へ親族及び禽獸魚類食料の數品を貯へ此蓄害を待つ
既にして大雨するあと晝夜止まざ忽ち世界の萬物を
悉く流亡して「ソ」特り洪水の波上に浮び辛して其蓄
害を免かれたりぞ云へり又「ソドマ」「エモラ」と云へる
國あり紀元前の數日燄火降りて其國中の萬物焼滅す
る其時「ロト」と云へる聖者あり此災ひを知つて妻を率
いて遠く他國の深山にのがる其妻欲あり美玉珍寶を
吝んで我國を顧る其情欲起るに於て遽然山峰の反覆
に於て擡柱となる其形子今存在せりとなり是をゆつ

て視れば必らき始有は終あり首あれば尾あり天運順
 還自然の理なり今世滅亡の期にあたりぬれば果して
 降火をもつて世界を焼亡し震災逆浪の難にあひて人
 命を矢ふ下にはなりぬべし既に紀元前の聖者の能く
 知る處なり毫も疑ふ可らば苟も世上に生息する衆民
 に於てをや依て朝暮正道にとりて天に誓て信仰
 せば彼の「ノワ」「ロト」乃如く天乃冥助を受へしとなり
 斯の如く聖書に委しく認してあると斷しに久平つく
 くと思ひ合せ「それハ佛法者流の教にも善を脩すれ
 ば極樂に往生するまた惡業に心を持なせば未來の地
 獄ハるぞ知らば此世からして其罪の輕重によつて上

よりしての御咎め蒙る事ハ眼前なれど人ごとしに身ハ
 つゝしんで居るなれど天のなせる禍ハさくる事あた
 わざといふ事なれば此度のやうな風説にモシヤか、
 らばどうしやうと思ふと夜の目も眠られぬと愚痴を
 かみませ歎息なすし咄らにつらなる書生の牛柱も氣
 の毒に思われ「イヤ其心痛ハた道理なれど去りして
 ハ小さい了簡さう苦勞にしてハたまりませぬナト氣
 を廣くた持なさる當今開化の御代なれば心をくつ
 て。いてハいけ升ぬ。アノ誰ヤらの道歌であつた。〇氣
 ハ長くつとめハ強く色薄く食細ふして心廣かれおの
 歌のこゝろを土臺にすつておりく餘力のたのしみ

狂歌俳諧なども随分なもしろいもののござり升ナト
 ねやりなさいとす、むるよ、有がとうござり升が
 若い時分からして不器用もの姓名をへも今田久平を
 こが彼の名詮自稱じやら僕なぞも俳諧の道に分いつ
 て俳号を午桂といふ、正午の月といふ心いさ、か世
 界を餘所に見てくらす、了簡何事に附てもあまり苦勞
 にして、開きがつき弁ぬ、昔唐の世に正直か人が
 あつて何かにつけて考て、苦勞にする、或時晴天をうち
 見や、儲もよく晴れたり、長閑か、日和かなと、四方を
 うちあやめありし所に、大空に一點の雲もあくと、目に及
 ぶだけの其さき、大海につらなり、見究のなかりせば

儲も此蒼空の廣大なる事、凡里數何万里程あるべきや
 を考へ、だして心もたまらざ、天の高さ凡七万八千九百
 七十里、地の厚さ凡五万九千四十九里、日月の徑り凡一
 千里と、白虎通に、書たれど、夫を誰あつて自ら測量な
 したものとてもなく、天の高さに比するときは、無量無
 邊の大きさをなすべし、斯見渡したる所、一圓の盤石の
 如し、此盤石、空天の底、秘けて地に落ちたらんに、如何
 世界の人皆ごるゝなるべしと思ひつゝ、けて氣やとど
 なり、終に、重き病ひに臥して、身まかりけるとなり、其
 の身ひとり命おはれば、身に添ふて行くものとして、一
 ツもなとこれぞ生者必滅の悟道、爰な、人間一生の

事ハおろカ萬物ともは是に歸するや世界の道理を解
 示され久平ハ漸々夢のさめたる心地さて〜君はま
 たお年わかたれどよくぞ世界の事を見ひらき只今の
 御教諭千疋かたじけなしとぞ全く開化日進の尊さ
 有かたしと三拜なさんと思ふをりから風ハ誘引て野
 毛山の六時ハ鐘に明がらすむや東雲をつげわたるハ
 わい〜のその聲に頭をあげて見ゆれば妻や愛子
 の無事を顔見るにこゝろも安堵して偕ハ今のは夢で
 ありし如めでぬ〜〜〜

明治十四年十月四日御届

十月八日出版

定價五錢

横濱浪花町一番地

著者 村田幸三郎

同吉田町壹丁目七番地

畫工 歌川國松

同吉田町壹丁目七番地

出板人 歌川國鶴

同尾上町壹丁目四番地

印刷人 太田長四郎

東京南鞆町

賣捌人 有喜世新聞三益社

同通三丁目

同 小林鐵治郎

歐 小 林 爲 全 國

三 十 日

百 餘 人 亦 曾 出 席 會 議

三 十 日

會 議 人 員 亦 曾 出 席 會 議

三 十 日

會 議 人 員 亦 曾 出 席 會 議

三 十 日

會 議 人 員 亦 曾 出 席 會 議

三 十 日

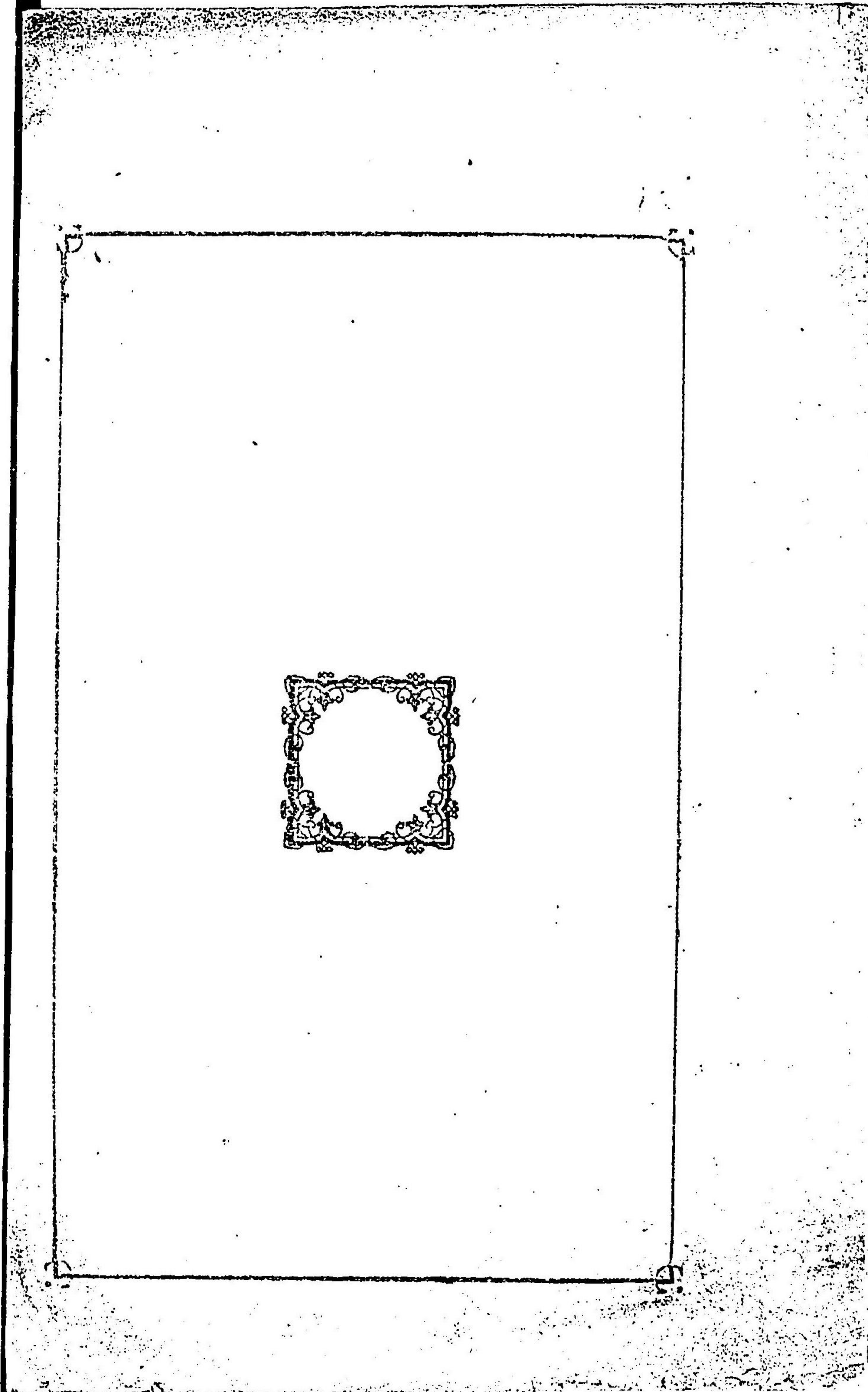
會 議 人 員 亦 曾 出 席 會 議

三 十 日

十 月 十 日

第 十 四 號 十 月 十 日





4781

129
5
122

英國コリンズモリス氏
松井 鉤夫 著

世界 変地奇論 全

明治十四年
十月刊行

松壽堂梓



091870-000-6

特25-114

変地奇論

松井 鉤夫 / 著

M14

DBO-0402

